高校生がエイズ患者と交友関係を継続する要因

—1989年と1992年に実施されたエイズに関する知識、情報入手経路、態度の調査結果から—

岡 島 史 佳, 荒 記 俊 一, 村 田 勝 敬, 横 山 和 仁

東京大学大学院医学系研究科・医学部公衆衛生学教室

A Study on the Factors Affecting Friendship with HIV-infected Students in High School : from the Survey of AIDS Related Knowledge, Information Sources and Attitudes in 1989 and 1992

Fumika OKAJIMA, Shunichi ARAKI, Katsuyuki MURATA and Kazuhito YOKOYAMA

Department of Public Health and Occupational Medicine, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

Abstract To clarify the factors affecting the friendship with human immunodeficiency virus (HIV)-infected persons, a self-reported questionnaire study was conducted in two high schools in Tokyo in 1989 and 1992. A complete set of responses was obtained from 541 (98%) and 517 (99%) students in 1989 and 1992, respectively. The following results were obtained:

1) The proportion of the students who received information on HIV/acquired immunodeficiency syndrome (AIDS) from school teachers in 1992 was higher than that in 1989 for both males and females. Similarly, for both males and females, the proportion of students with correct knowledge on HIV transmission was significantly higher in 1992. The proportion of the students who intended to have a friendship with a hypothetical HIV-infected classmate or close friend in 1992 was significantly higher.

2) The results of multiple logistic regression analysis indicated that such factors as having more correct knowledge on HIV transmission and considering the confidentiality of persons with HIV/AIDS were significantly related to having friendship with a hypothetical HIV-infected classmate for both 1989 and 1992; such factors as being a female and having an increasing risk of HIV infection were significantly related to the responses obtained for 1992.

Key words: Human immunodeficiency virus (HIV) (ヒト免疫不全ウイルス),
Acquired immunodeficiency syndrome (AIDS) (後天性免疫不全症候群, エイズ),
School health (学校保健), Mental health (精神保健)

はじめに

ヒト免疫不全ウイルス (Human immunodeficiency virus, 以下HIVと省略) の感染によって生ずるエイズ (Acquired immunodeficiency syndrome) 患者は1989年には世界で254,078人, 日本で189人と報告されたが¹⁾, 1992年には世界で718,894人, 日本では566人²⁾となり, この3年間で急速に増加した。エイズは, 感染経路が明らかであり致死率が高いため, 感染防止のための教育が効果的で重要である³⁾。この目的に沿

って, 東京都は1992年以降毎年マスメディアを通じてエイズキャンペーンを行っており⁴⁾, 文部省も1992年に全国の高校生にエイズに関する教育用小冊子を配付した⁵⁾。1991年には米国のプロバスケットボール選手であるマジックジョンソンが自らのHIV感染を発表⁶⁾, 1992年に日本の非政府団体であるエイズアクションが街頭キャンペーンを行なう⁷⁾等, エイズへの認識が高まる社会環境が徐々に形成された。ある大新聞に掲載されたHIVおよびエイズ (以下, 合せてHIV/エイズと省略) の記事は, エイズ予防法 (後天性免疫不全症候群の予防に関する法律) が施行された1989年⁸⁾の1年で75件であったが, 1992年には320件と増加し⁹⁾, 新聞, テレビ, 雑誌等のマスメディアによる教育効果も期待されている。

これまでに, 高校生を対象としたエイズ教育と予

受付 1998年7月3日 受理 1998年9月24日

Reprint requests to: Shunichi ARAKI,
Department of Public Health and Occupational Medicine, Graduate
School of Medicine, The University of Tokyo, Hongo7-3-1, Bunkyo-
ku, Tokyo 113-0033, Japan
TEL: +81(3)3812-2111 (Ext)3490

防キャンペーンがエイズに関する知識を正確にし、HIV感染につながる行動を変容させるという報告がみられる⁹⁻¹¹⁾。同様に、エイズの正確な知識をもつ高校生はエイズ患者との交友関係に肯定的であるという研究報告¹²⁾がある。しかし、エイズ教育と予防キャンペーンがエイズ患者との交友関係に及ぼす影響に関する研究報告は見当たらない。

本研究では、東京都内の高等学校の生徒を対象として、HIVの感染経路の知識、HIV/エイズ情報の入手経路、エイズ患者との交友関係を継続する意志およびエイズに関する意識について3年間の変化を検討する。これにより、エイズ患者との交友関係を継続する意志に与える要因を明らかにする。

対象と方法

1. 調査対象と質問紙調査法

1989年と1992年に東京都区内と区外の各1つの都立高校の1～3年の各学年から2学級ずつ(合計12学級)を選んだ。これらの生徒数は1989年は550人、1992年は520人であった。なお、それぞれの高校の生徒数は、1989年は各々1,423人、1,208人、1992年は1,180人および1,033人であった。各年次の12月に、学級担任が各学級の全員に自記式質問紙(無記名)と返却用封筒を配布し、回収した。

質問紙の質問項目は各自の学年、性別、感染経路の知識、感染の可能性、エイズ患者のプライバシーの配慮、HIV/エイズ情報の入手経路、エイズ患者(仮定)の級友との交友関係を継続する意志、およびエイズ患者(仮定)の親しい友人と交友関係を継続する意志であった(付表)。なお、本調査の実施時点では、「HIV」より「エイズウイルス」という用語の方が一般的であったので、質問紙では後者の用語を使用した。また、エイズ患者との噂のある級友または親しい友人(いずれも仮想の患者)と今までどおり付き合うと回答した生徒を、これらの友人との交友関係を継続する意志があると判定した。

質問紙の有効回答率は、1989年は98.6%(541人)、1992年は99.4%(517人)であった。これらの有効回答者の内訳をTable 1に示す。

2. 統計処理

1989年の男子で質問項目への回答の有意差を2校間で比較すると、全ての項目で有意差がなかった($p>0.05$, Table2)。1989年の女子および1992年の男子、女子はそれぞれ1, 2, 1項目に有意差を認めたが($p<0.05$)、多重比較テスト(Bonferroni法)では全ての項目で有意差がみられなかった($p>0.05$)。同様に、同じ質問紙項目の1, 2, 3学年間の有意水準を χ^2 検定(2×3 分表)で比較すると、1989年の男子、女子および1992年の男子、女子はそれぞれ20項目中3, 1, 2, 5

Table 1 Study subjects in schools A and B in 1989 and 1992

School Year	1989		1992	
	A	B	A	B
Males:				
1st	48	61	46	42
2nd	47	62	42	48
3rd	44	47	47	47
Total	139	170	135	137
Females:				
1st	43	34	44	43
2nd	43	32	42	35
3rd	40	40	44	37
Total	126	106	130	115

項目に有意差がみられ、多重比較テストを行なうとこのうちカイ二乗値の高い7項目で有意差が認められた。本稿では各質問項目の1989年と1992年間の有意水準を解析したので、男女別に2校および3学年を合計した質問項目を、学年差を考慮したMantel-Haenszelの χ^2 検定(Table3～5)および繰返しのある二元配置分散分析法(年次差と学年差, Table5)を用いて検定した。

1989年と1992年でエイズ患者である級友(仮定)との交友関係を継続する意志の有無により有効回答者541人(1989年)、517人(1992年)をそれぞれ2群に分け、この2群間で各項目の有意差を χ^2 検定およびt検定で解析した。その後、級友との友人関係を継続する意志の有無で有意差があった項目(4要因)と性および学年を説明変数とし、交友関係の継続意志を目的変数とする多重ロジスティック解析を行なった。統計解析は統計パッケージSPBS(ユニサイエンス社)を用いて行なった。

結 果

1. HIV/エイズ情報の入手経路

HIV/エイズに関する9種類の情報源の1つ1つについてそれらから情報を得たと回答した生徒数とその割合を男女別、年次別にTable 3に示す。男子では1992年に学校の先生から情報を得た生徒の割合が1989年より有意に高かった。同様に、女子では学校の先生のほかに友人、保健所の小冊子、雑誌および本から情報を得た生徒の割合が1992年においては1989年に比し有意に高かった。

2. 感染経路に関する知識

男子では、注射針の共用、同じ鍋や皿をつつくこと、入浴、握手およびキスによる感染経路に関する正答率が、1992年が1989年より有意に高く、逆に輸血による感染の正答率が有意に低かった(Table 4)。

同様に女子では、男子で高かった項目に加えて、性交による感染経路の正答率が1992年に有意に高かった。輸血による感染経路の知識では有意差がなか

Table 2 Differences in the respondents to self-reported questionnaires (numbers with percentage in parentheses) among all male students between two high schools (all school-year students combined) in 1989

Questionnaires ^{#1}	Schools		Chi-square value ^{#2}
	A (N=139)	B (N=170)	
Knowledge on modes of infection			
Kissing ^{#3}	86 (62)	104 (61)	0.01
Shaking hands ^{#3}	132 (95)	166 (98)	1.60
Taking a bath together ^{#3}	128 (92)	160 (94)	0.51
Eating from others' plates ^{#3}	121 (87)	148 (87)	0.00
Sexual intercourse ^{#4}	134 (96)	165 (97)	0.11
Sharing needles ^{#4}	125 (90)	151 (89)	0.10
Receiving blood transfusions ^{#4}	136 (98)	161 (95)	2.01
Belief of having a risk of infection with HIV	44 (32)	65 (38)	1.45
Protection of confidentiality of persons with HIV/AIDS.	89 (64)	105 (62)	0.17
Information sources on HIV/AIDS:			
School teachers	40 (29)	57 (34)	0.80
Friends	36 (26)	56 (33)	2.81
Family members	23 (17)	37 (22)	1.33
Leaflets from health center	25 (18)	30 (18)	0.01
Newspapers	109 (78)	140 (82)	0.78
Magazines	79 (57)	114 (67)	3.41
Books	23 (17)	21 (12)	1.10
Television	131 (94)	151 (89)	2.81
Radio	31 (22)	36 (21)	0.06
Intention to continue to be a friend with a hypothetical HIV-infected classmate	60 (43)	62 (37)	1.43
Intention to continue to be a friend with a hypothetical HIV-infected close friend	73 (53)	76 (45)	1.90

#1: See appendix. #2: $p>0.05$ for all respondents. #3: HIV not transmitted. #4: HIV transmitted.

Table 3 Differences in the number (percentage in parentheses) of high school students who received information on HIV/AIDS from nine information sources between 1989 and 1992

Information source	Males		p-value [#]	Females		p-value [#]
	1989 (N=309)	1992 (N=272)		1989 (N=232)	1992 (N=245)	
School teachers	97 (31)	190 (70)	<0.001	68 (29)	143 (58)	<0.001
Friends	92 (30)	90 (33)		58 (25)	86 (35)	<0.05
Family members	60 (19)	56 (21)		56 (24)	79 (32)	
Leaflets from health centers	55 (18)	64 (24)		35 (15)	70 (29)	<0.001
Newspapers	249 (81)	203 (75)		179 (77)	172 (70)	
Magazines	193 (63)	164 (60)		107 (46)	159 (65)	<0.001
Books	44 (14)	51 (19)		12 (5)	66 (27)	<0.001
Television	282 (91)	254 (93)		224 (97)	232 (95)	
Radio	67 (22)	58 (21)		23 (10)	26 (11)	

#: Chi-square test with Mantel-Haenszel method, 1989 versus 1992.

った。

3. エイズ患者（仮定）との交友関係継続の意志

1992年に、エイズ患者である級友および親しい友人（いずれも仮定）との交友関係を継続する意志をもつ生徒の割合は級友および親しい友人について男女とも1989年より有意に高かった (Table 5)。

4. 自分自身の感染の可能性とプライバシーに対する配慮

同様に、自分自身がHIVに感染する可能性がある

と認識している生徒の割合は1992年の方が有意に高かった (Table 5)。また、HIV感染者・エイズ患者のプライバシーの保護が必要であるとの認識を有する者は男女とも、両年次間で有意差が認められなかった (Table 5)。

5. エイズ患者（仮定）との交友関係を継続する意志に関連する要因

「エイズ患者（仮定）である級友と交友関係を継続する意志」のある生徒と無い生徒の2群間で、1989年または1992年に有意差がみられた5要因を

Table 6に示す。これらの5要因と学年を説明変数とし、「エイズ患者(仮定)である級友と交友関係を継続する意志」を目的変数とする多重ロジスティック分析の結果をTable 7に示す。エイズ患者(仮定)である級友との交友関係を継続する意志は、両年次とも「感染経路に関する正しい知識」および「HIV感染者/エイズ患者のプライバシー保護に配慮すること」と有意な正の関連があった。また、1992年のみで、「女子」および「自分自身の感染可能性の認識があること」と有意な正の関連があった。

考 察

学校の先生をHIV/エイズの情報源とする男女の生徒の割合は1989年より1992年の方が多かった。学校や職場などの日常生活でHIVが感染しないという正確な知識を持つ高校生の割合も同様に1992年の方が高かった。Hingsonら⁹⁾は、米国の16~19歳の青少年を対象とした断面研究より、1986年から1988年の2年間で学校教育がHIV/エイズの知識を増加させ、青少年の薬物および性行動を変容させたことを明らかにした。Holzmanら¹⁰⁾は、1989年と1990年の米国の高校で、学校のエイズ教育とHIV/エイズに関する知識がHIV感染を引き起こす危険行動を抑制することを示した。今回の研究結果から学校教育により高校生のHIV/エイズに関する知識が普及した可能性が示唆される。

感染経路の知識は全体として2年次間で向上していた。特に、同じ皿をつつく、風呂に入る、握手をするという学校や職場などの日常生活、あるいはキスによって感染しない、注射のまわし射ちで感染するという知識を持つ生徒の割合は男女とも有意に増加した。これらは、文部省の高校生用小冊子に記載され、マスコミでも強調された事項であるのでその影響かもしれない。

輸血による感染の知識は男子で低下した。1986年より献血血液についてエイズ抗体検査を実施してい

るので安全であると報道された¹¹⁾。このため、相手がエイズ患者の場合も感染しないという誤った知識に結びついてしまった可能性がある。当時は、女子のみ必修であった家庭科で母子感染と関連させてエイズを扱うことが推奨されていたため¹²⁾、女子は学校で正確な知識を得る機会が多く知識の混乱が少なかったと考えられる。

性交を感染経路と正答した割合は1992年の方が女子のみで有意に高かった。これは一つには、前述のように学校での教育の機会が女子で多くなったことに起因するであろう。今一つは、性交経験率を1987年と1993年で比較すると男子高校生が11.5%と14.4%であったのに対して女子では8.7%と15.7%と報告されており¹³⁾、このような女子の性行動の積極化が女子の性交に関する知識を以前より正確にさせたと推測される。一方、男子は1989年の時点ですでに97%の生徒が性交による感染の知識を有していたので、それ以上の有意な増加はなかったであろう。

エイズ患者である級友との交友関係を継続する意志に関連する要因として、両年次に共通して(1)感染経路に関する正しい知識と、(2)エイズ患者のプライバシーに対する配慮が、多重ロジスティック分析により選択された。看護学生を対象とした調査で、「食器で感染する」と誤解している者は「友人が感染したときに付き合いを減らす」または「わからない」と回答する傾向が認められたことが報告されている¹⁴⁾。また、日常的接触によりHIVに感染すると誤解をしている高校生は、エイズ患者が学校に来るべきでないと答える傾向が高かった¹⁵⁾。このように、感染経路に関する正確な知識をもつことがHIV感染者/エイズ患者に対する受容的態度と結びつくと考えられる。

一方、プライバシーに対する配慮とHIV感染者への態度との関連を検討した研究はこれまでにみられないが、HIV感染者/エイズ患者の診療を受入れる意志のある病院は患者のプライバシーが守れる診療室を持っていることが報告されている¹⁶⁾。HIV感染者であることが他人に知られると学校への入学を拒否され

Table 4 Differences in the number (percentage in parentheses) of high school students who had correct knowledge on HIV transmission between 1989 and 1992

Knowledge on modes of HIV transmission	Males			Females		
	1989 (N=309)	1992 (N=272)	p-value ^{#1}	1989 (N=232)	1992 (N=243)	p-value ^{#1}
Kissing ^{#2}	190 (62)	239 (88)	<0.001	148 (64)	211 (86)	<0.001
Shaking hands ^{#2}	298 (96)	270 (99)	<0.05	228 (98)	245 (100)	<0.05
Taking a bath together ^{#2}	288 (93)	269 (99)	<0.001	206 (89)	241 (98)	<0.001
Eating from others' plates ^{#2}	269 (87)	268 (99)	<0.001	205 (88)	239 (98)	<0.001
Sexual intercourse ^{#3}	299 (97)	269 (99)		208 (90)	239 (98)	<0.001
Sharing needles ^{#3}	276 (89)	266 (98)	<0.001	203 (88)	238 (97)	<0.001
Receiving blood transfusions ^{#3}	297 (96)	249 (92)	<0.05	220 (95)	234 (96)	
Numbers of correct knowledge (Mean±SD)	6.2±1.0	6.7±0.6*		6.1±1.0	6.7±0.6*	

#1: Chi-square test with Mantel-Haenszel method.

#2: HIV not transmitted.

#3: HIV transmitted.

*: p<0.01 (Two-way analysis of variance, 1989 versus 1992).

Table 5 Differences in the respondents (numbers with percentage in parentheses) of high school students who agreed with four beliefs between 1989 and 1992

Statements	Males			Females		
	1989 (N=309)	1992 (N=272)	p-value ^{#1}	1989 (N=232)	1992 (N=245)	p-value ^{#1}
a) Intention to continue to be friends with a hypothetical HIV-infected student:						
Even if you hear a rumor that your classmate is infected with HIV, you will continue to be friends with him (her) as in the past	122 (39)	199 (73)	<0.001	105 (45)	198 (81)	<0.001
Even if you hear a rumor that your close friend is infected with HIV, you will continue to be friends with him (her) as in the past	149 (48)	225 (83)	<0.001	142 (61)	215 (88)	<0.001
b) Chance to be infected with HIV:						
You might be infected with HIV	109 (35)	147 (54)	<0.001	63 (27)	123 (50)	<0.001
c) Protection of the confidentiality of persons with HIV/AIDS:						
Confidentiality of persons with HIV/AIDS should be protected	194 (63)	169 (62)		161 (69)	154 (63)	

#1: Chi-square test with Mantel-Haenzel method, 1989 versus 1992.

たり、いじめにあったりすることが報告され¹⁸⁾、現状ではプライバシーの配慮の欠如が差別に結びつく可能性が高い。エイズ患者に対して受容的な態度を示す生徒はエイズ患者のプライバシーの重要性を理解している傾向があったと思われる。この心理過程については今後より詳しい研究が必要である。自分自身がHIVに感染する可能性があるという認識は、1992年のみでエイズ患者との交友関係の継続意志と正の関係があった。この関係は看護学生に対する調査結果¹⁹⁾と一致する。本調査では自分自身がHIVに感染する可能性があるという認識をもつ生徒は1992年の方が多かった。これは高校生の性行為経験率の経年的上昇¹⁹⁾の影響とも考えられる。一方で、東京都のエイズキャンペーンやプロスポーツ選手が自らのHIV感染の公表等の影響によりエイズは他人事ではないと考えるようになったとも考えられる。エイズに対する報道の姿勢が恐ろしさを教え危険に近づかぬようにするというものから¹⁹⁾、恐ろしいと思うだけではなく正しい知識をもち予防行動をとり他人事意識をなくすもの⁹⁾へ変化した。このため、特に1992年ではHIVに感染することが決して他人事ではなくなり、エイズ患者に対しても受容的な態度を示したと考えられる。

交友関係を継続する意志をもつ生徒の割合は両年次とも女子の方が男子より多かった。この知見は女子は男子よりHIV/エイズに対して偏見的でないことを示した研究結果^{12), 20)}と一致する。また、エイズに関する知識、態度および行動に性差があることが米国の高校生の研究で報告されている^{10), 12), 21)}。

Eisenberg²²⁾らのコホート研究では9～10歳の女子

は男子よりも他人に対して同情的であった。あるいは、Gilligan²³⁾は両性の道徳的判断の違いについて女性他他人の苦悩を見分けそれを緩和する責任を感じるのに対して男性では他人に干渉しないことを義務と考えている傾向があることを面接調査により観察した。以上から、女子はエイズである級友に対して男子より受容的な態度を示す傾向が高いことが予想される。なお、日本ではバブル経済の崩壊の翌年(1992年)より、男女雇用機会均等法下での女子学生の就職難が問題視され始めており²⁴⁾、このような社会経済情勢下の女子差別が受容的な態度の男女差に影響を及ぼしたのかも知れない。

最後に、HIV感染者/エイズ患者のグローバルな増加とともにこれまで沈黙していた感染者/患者が自らの病名を名乗り始めた。当初は社会的パニックを引き起こし、感染者の家が不審火で全焼される例もあった⁹⁾。近年、エイズ教育が浸透し、人々の感染者/患者への受容的な態度が徐々に高まりつつあるように思われる。今後、今回示された幾つかの要因の因果関係を含めたさらなる実証的研究が必要である。

本調査にご協力いただきました都立高校の皆様と、貴重なご助言をいただきました佐田文宏助手に感謝します。

文 献

1) 厚生統計協会. 厚生 の 指標・臨時増刊 国民衛生の動向. 1990; 37: 159.

Table 6 Differences in five variables between the high school students with or without the intention to continue to be friends with a hypothetical HIV-infected classmate (numbers of students and percentages in parentheses)

Variables	Students in 1989			Students in 1992		
	With intention (N=227)	Without intention (N=314)	Difference ^{#1} (p)	With intention (N=397)	Without intention (N=120)	Difference ^{#1} (p)
Gender:			NS			<0.05
Males	122 (54)	187 (60)		199 (50)	73 (61)	
Females	105 (46)	127 (40)		198 (50)	47 (39)	
Number of correct knowledge on HIV transmission (mean+SD)	6.4+0.8	6.0+1.0	<0.001 ^{#2}	6.8+0.5	6.6+0.7	<0.01 ^{#2}
Beliefs:						
Having the risk of being infected with HIV	80 (35)	92 (29)	NS	217 (55)	53 (44)	<0.05
Protection of the confidentiality of persons with HIV/AIDS	172 (76)	183 (58)	<0.01	260 (65)	63 (53)	<0.05
Receiving information from books	32 (14)	24 (8)	<0.01	93 (23)	24 (20)	NS

#1: Chi-square test. #2: Student's t test. NS: p>0.05.

Table 7 The relationship of such factors as gender, high school year, correct knowledge on HIV transmission, the risk of being infected with HIV, confidentiality of persons with HIV/AIDS, and information from books, to the intention of being friends with a hypothetical HIV-infected classmate: multiple regression analysis

Independent variables	1989 (N=541)			1992 (N=517)		
	Estimated coefficient	Standard error	Chi-square value	Estimated coefficient	Standard error	Chi-square value
Gender ("Male"=1, "Female"=0)	-0.265	0.183	2.08	-0.481	0.221	4.74*
High school year ("1st"=1, "2nd"=2, "3rd"=3)	-0.053	0.111	0.23	0.031	0.133	0.06
Correct knowledge of HIV transmission	0.372	0.102	13.2***	0.694	0.172	16.3***
Risk of being infected with HIV ("Yes"=1, "No"=0)	0.353	0.195	3.27	0.469	0.219	4.60*
Confidentiality of persons with HIV/AIDS ("Yes"=1, "No"=0)	0.712	0.197	13.0***	0.658	0.220	8.97**
Information of HIV/AIDS from books ("Yes"=1, "No"=0)	0.219	0.205	1.14	0.113	0.274	0.17

*p<0.05; **p<0.01; ***p<0.001.

2) 厚生統計協会. 厚生 の指標・臨時増刊 国民衛生の動向. 1993 ; 40 : 161.

3) Comittee for the Study of the Future of Public Health. The Future of Public Health. Washington, DC: National Academic Press, 1988.

4) 稲垣智一. 東京都エイズキャンペーンの 評価に関する調査. 厚生 の指標 1994 ; 41 : 20-6.

5) 文部省. AIDSー正しい理解のためにー. 東京 : 日本学校保健会, 1992.

6) 患者の権利検討会企画委員会・技術と人間編集部 (編). エイズと人権. 東京 : 技術と人間, 1992 : 149.

7) 厚生省保健医療局エイズ結核感染症課 (監修). エイズ対策関係法令通知集 (エイズ対策必携). 東京 : 厚健出版. 1995.

8) 平田繁, 渡邊正樹, 勝野真吾. マス・メ ディアのAIDSの取扱いに関する研究ー1982年から1992年までの新聞記事の内容分析ー. 民族衛生 1995 ; 61 : 2-15.

9) Hingson, R., Strunin, L. and Berlin, B.. Acquired

immunodeficiency syndrome transmission : Changes in knowledge and behaviors among teenagers. Massachusetts Statewide Surveys. 1986 to 1988. Pediatrics 1990 ; 85 : 24-9.

10) Holtzman D, Lowry R, Kann L, Collins J L, Kolbe L J. Changes in HIV-related information sources, instruction, knowledge, and behaviors among US high school students, 1989 and 1990., Am J Public Health 1994 ; 84 : 388-93.

11) Werdelin, L.. An update on knowledge and sexual behaviour among students in Greenland. Scand J Soc Med 1992 ; 20 : 158-64.

12) Siegel D, Lazarus N, Krasnovsky F, Durbin M, Chesney M. AIDS knowledge, attitudes, and behavior among inner city, junior high school students. J School Health 1991 ; 61 : 160-5.

13) 厚生統計協会. 厚生 の指標・臨時増刊 国民衛生の動向. 東京 1995.

14) 財団法人日本学校保健会. エイズに関する指導の手引き. 東京 : 財団法人日本学校保健会, 1992.

- 15) 日本性教育協会 (編). 青少年の性行動わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告 (第4回). 東京: (財)日本性教育協会, 1994.
- 16) 岡田耕輔, 小寺良成, 安田誠史, 大原啓志. 看護学生の持つHIV/AIDSに関する知識と意識・態度との関連. 公衛誌 1994; 41: 538-48.
- 17) 岡島史佳, 荒記俊一, 塩川優一, 他. エイズ (AIDS) 患者の診療体制に関する研究—東京都エイズ研究班の病院調査より—. 公衛誌 1995; 42: 799-807.
- 18) 東京弁護士会人権擁護委員会編. HIV感染をめぐる差別人権侵害事例. 東京: 東京弁護士会, 1989.
- 19) 朝日新聞朝刊 1987年1月19日.
- 20) Heaven P C L, Connors J, Kellehear A. Structure and demographic correlates of attitudes toward AIDS sufferers. J Psychology 1990; 124: 245-52.
- 21) Kann L, Anderson J E, Holtzman D, et al. HIV-Related knowledge, beliefs, and behaviors among high school students in the United States: Results from a national survey. J School Health 1991; 61: 397-401.
- 22) Eisenberg N, Shell R, Pasternack J, Lennon R, Beller R, Mathy R M. Prosocial development in middle childhood. A longitudinal study. Developmental Psychology 1987; 23: 712-8.
- 23) Gilligan. In a different voice psycho logical theory and women's development. Cambridge: Harvard University Press, 1982.
- 24) 朝日新聞朝刊 1992年7月30日.